

(熊本郡中種子町大字田島字吹拳浜)

### 位置と環境

遺跡は、町の中心部から南西に7km離れた西海岸に注ぐ苦浜川下流の河床中に立地する。苦浜川は、中種子町で2番目に大きい河川で、周辺は広大な砂丘地である。苦浜川が注ぐ長浜海岸は、全長12kmにも及びウミガメの産卵地としても有名である。

### 調査の経緯

昭和25年の夏に、盛園尚孝によって発見され、その発見者の私財と情熱により発掘調査が実施された。貝塚に台地の一部が突出して迫って来たり、流水により浸食されたりという現状であったため、記録保存を目的に調査が実施された。

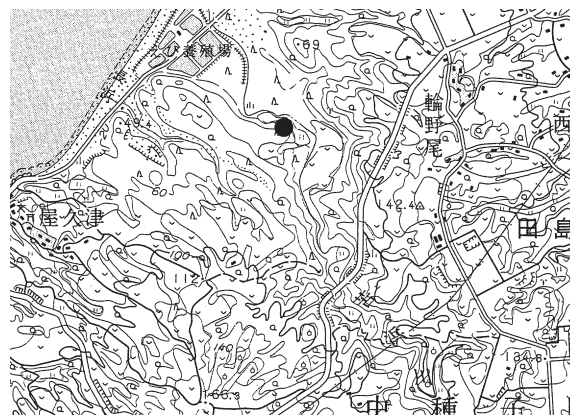
### 遺構と遺物

貝塚は、東西約1.5m、南北12mの細長い形で水面に露出し、西側斜面は1cmほどの被層がみられるが、東側は流水による侵食のため混土貝層が露出していた。上層は、暗赤褐色土層で、下層は混土貝層となるが、当時の技術、道具、資金では流水を防いだりといったことが難しく遺物の出土状況や層位的な観察が難しかった。こういった理由により、苦浜式土器の標識遺跡ではあるが、当時は縄文時代前期の轟式土器系ということで前期に比定されていた。そして、その後の南種子町横峯遺跡などの出土状況により縄文時代早期の土器に変遷したという経緯である。

貝層には、シカの歯・角・骨、イノシシの牙・骨、イルカの歯等の動物のものやサメの歯や骨といった魚類、ウニのとげといったものが含まれていた。そして、タイワンサルボウ・サルボウ・イガイ・カキ類・ハマグリ類・カガミ貝類・シジミ・シオヤ貝類・巻き貝類といった貝で被われていた。

石器は、打製石斧と局部磨製石斧欠損品、石鏃といったもので、石材は頁岩である。そのほか、礫器状のものや石庖丁状のもの等の報告がある。

土器(第2図)は、胎土が粗く混砂量が多く、色調は赤褐色から黒褐色でまれに黒灰色もみられる。比較的厚手で、焼成は割に脆弱で特に底部にかけては粗いものである。器形は、深鉢形と鉢形ですべて



第1図 苦浜貝塚の位置

平底である。深鉢形は、頸部が緩くしまり胴部が少し膨らんだもので口縁部が少し外反するもの(2・3・4・7)と、直口するもの(1)があり、また口縁部から頸部へ少し肩の張ったもの(6・8・9)がある。鉢形は、(5)である。なお口縁部に緩やかな山形突起のあるもの(2・3・4)もある。文様は、器面に貝殻条痕文を施文し、口縁部・頸部に刻目のある隆帯・凸帯のつくもの(1・2・3・4・8)もある。

### 特徴

本遺跡において特筆すべきことは、縄文時代早期の貝塚であるということである。また、地域性の強い土器として認識されていた苦浜式土器が県内にも類例が増えてきており、土器編年における重要な資料と考えられる。

貝塚の下部については河床の砂層中に埋没していたため調査されていないが、現在は苦浜川の流路変更等により所在不明である。遺跡は、中種子町指定史跡(昭和55年3月26日)。

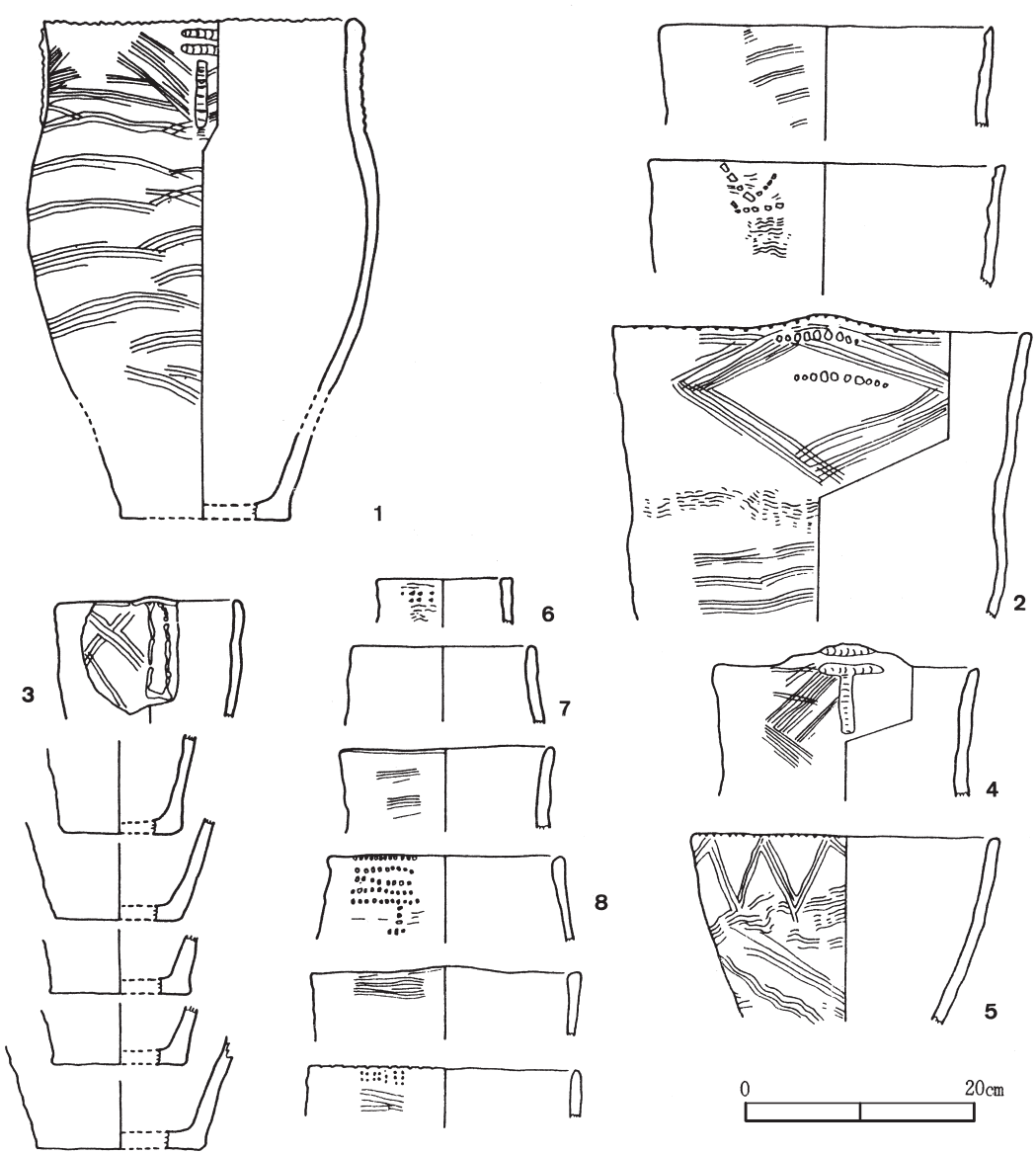
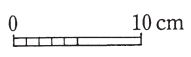
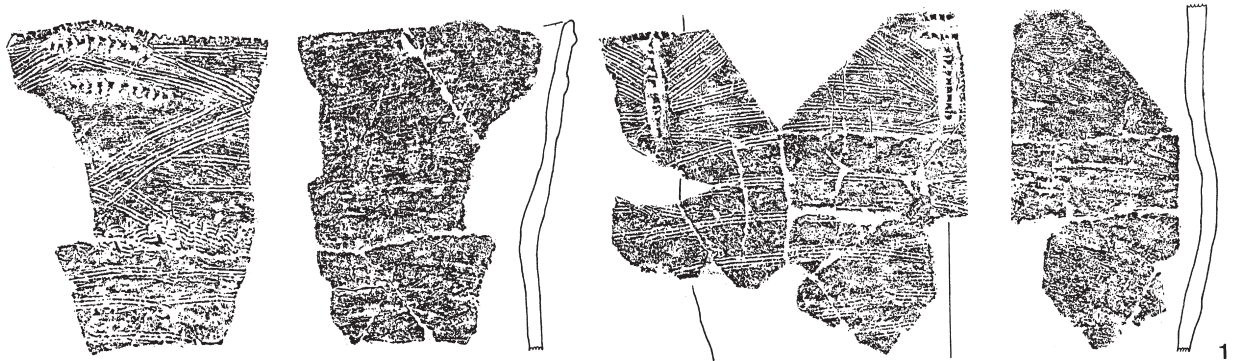
### 資料の所在

出土遺物は、盛園尚孝宅に収蔵・保管されている。

### 参考文献

盛園尚孝1953「鹿児島県熊本郡中種子町尾久津苦浜貝塚について」『古代学研究』第8号  
南種子町1987『南種子町郷土誌』

(田平祐一郎)



第2図 出土遺物